

北海道大樹町当縁川河口域に残存する湿原植生(基礎調査)

Wetland vegetation basic survey of "Touberi wetland"

新庄 久尚 (北方草地・草原研究所)

Hisanao Shinsho (Boreal grassland laboratory)

shinsho@hslabo.jp

【背景と目的】

北海道十勝地方の沿岸には、十勝川河口域である豊頃町から、南西部大樹町の歴舟川河口域にかけて、『十勝海岸湖沼群』と総称される湿地帯が形成されている。長節湖、湧洞沼、生花苗沼、ホロカヤントウ、キモントウ沼など複数の湖沼が点在する沿岸湿地帯は、十勝地方に残された湿地生態系として、環境省による『日本の重要湿地 500』に選定されている。

沿岸部の湿地帯は主に複数の湖沼と、河川河口域や旧川跡地などの周辺に広がる湿原によって構成され、湿地帯と海域の狭間には海岸段丘や砂丘が形成されている。湖沼周辺などにはヨシやイワノガリヤスなどが優占する低層湿原が広がり、湖沼では多くの水生植物群落が見られる。海岸段丘や砂丘上にはゼンテイカやヒオウギアヤメなどの湿生植物が生育するほか、高山の岩場や海岸などに生育するコハマギク、ガンコウランなどが群落を形成し、沿岸部における特徴的な植生環境が残されている。

十勝海岸湖沼群の植生環境については、上述したヨシやツルヨシ、イワノガリヤスなどのイネ科草本種が優占するフェン (fen=低層湿原) の実態や、淡水湖沼、汽水湖沼に存在する水生植物群落の特徴が知られてきている。他方、大樹町を流れる当縁川の河口域に形成される当縁湿原においては、海岸段丘斜面上において貧栄養な環境が形成されている。ここでは小規模なヌマガヤ群落のほか、ミズゴケ属やホロムイソゲ、ワタスゲ等といったボグ (bog=高層湿原) に特徴的な植物種の生育が確認されている。ただし、十勝海岸湖沼群においてこのような小規模群落がどの程度残されているか、また具体的にどの様な構成種が残存しているかなどの詳細については、未だ十分な知見が得られていない。

本発表は、大樹町当縁湿原の一部に残存しているミズゴケ属やスゲ属が優占する植生箇所の基礎調査を実施し、今後の保全や利活用に向けた基礎資料の収集を試みたものである。

【材料と方法】

大樹町当縁湿原の海岸段丘の緩斜面、およびその周辺において植物相の基礎調査を行い、現状でどの様な植生環境が残されているかについての確認を行った。

また、河川の増水時において冠水すると考えられる斜面下部と、通常冠水が生じないと考えられる斜面上部において、優占種等植生状況の変化を比較し、植生構造の概要について考察を行った。



【海岸段丘斜面に形成されたワタスゲ群落】

キーワード：十勝海岸湖沼群、ミズゴケ属、スゲ属、基礎調査